

Samkhya派知覚論について 『金七十論』と Samkhyavrttiを中心として

著者	中井 本秀
雑誌名	論集
巻	7
ページ	95-106
発行年	1980-12-31
URL	http://hdl.handle.net/10097/00127982

Saṃkhya 派知覚論について

——『金七十論』と *Saṃkhyavṛtti* を中心として——

中 井 本 秀

一般にインドの哲学思想の間では、対象認識を説明する際に、認識根拠 (*pramāṇa*) の一つとして、知覚 (*pratyakṣa*) という概念を導入する。それは Saṃkhya 派においても同様であって、Saṃkhya 派の現存する最古の綱要書 SK には、次のような知覚 (*dr̥ṣṭi = pratyakṣa*) が定義されている。

「知覚とは、それぞれの対象に対する決定⁽¹⁾である。」 *prativisayādhyavasāyo dṛṣṭam* (SK 5)

この定義の中で最も重要な位置を占める要語は、「決定」(*adhyavasāya*) であるが、それに関しては次の問題点²が指摘される。すなわち、SK 23 には、「覚は決定である。」(*adhyavasāyo buddhir*) という定義が見い出されるが、その場合、SK 5 の *adhyavasāya* (*adhyavasāya* (A)) と SK 23 の *adhyavasāya* (*adhyavasāya* (B)) との意味の解釈に関して、註釈書間で必ずしも取扱いが一定でないのである。従ってこの小論では、類似した知覚の解釈を示す『金七』と *V₂* との二つの註釈書を取り上げ、その内容を、二つの *adhyavasāya* の意味の解釈に注目しつつ説明し、更には他派文献との比較を通して、その位置づけを試みたい。

まず V_2 は SK5 及び SK23 の註釈を以て次のように述べる。

「知覚とは、色等の五対象に対する、眼等の五感官のこの決定であり、『これはこのようであって、それ以外ではない。』という決定である。」⁽²⁾ (ad SK5)

「覚は、『これは瓶である。』というように決定を特相とする。これが覚の定義である。」⁽³⁾ (ad SK23)

ここで、前者は「感官の決定」(indriyāṇāṃ adhyavasāyah) とするから「決定」すなわち adhyavasāya (A) を感官に属するものとして述べていると思われるが、後者は、覚の定義として「決定」すなわち adhyavasāya (B) を述べている。この二つは adhyavasāya (A) と adhyavasāya (B) とが、それぞれ異なった器官(感官と覚)に関わっていることを示すものである。

また、adhyavasāya (A) は「これはこのようであって、それ以外ではない。」という実例で示され、また adhyavasāya (B) は「これは瓶である。」という実例で示されている。adhyavasāya (A) は、抽象的な表現ではあるけれども、すでに明晰な内容を持ちつつ未だ言語表現されていないものを指示し、adhyavasāya (B) は、その言語表現がなされたものを指示すると思われる。言語表現の有無に一線を画すという理解である。瓶を認識する場合に例をとれば、adhyavasāya (A) においては、感官によって知覚対象の形・色・感触などは全体として明確に捉えられているが、未だ「瓶」という言葉によってその対象が表現されていない。adhyavasāya (B) においては、覚によって「瓶」という言語表現がなされるわけである。

『金七』は、SK5 及び SK23 の註釈において次のように述べる。

「對^{シテ}塵^ニ解^{スル}證^シ量^ス者^{ナリ}耳^ニ於^テ、聲^ニ生^ス、解^ス乃^チ至^リ鼻^ニ於^テ、香^ニ生^ス、解^ス唯^ニ解^ス不^レ能^ク、知^ル是^レ名^ヲ爲^ス證^シ量^ス」(ad SK5, p. 1246a)

【何名爲^ニ決智^ニ】謂^ハ是物名^ハ、関^ハ是物名^ハ、人如^シ此知覺^ハ是名^ニ決智^ニ」(ad SK 23, p. 1250c)

前者において、「解」は *adhyavasāya* (A) であるから、その *adhyavasāya* (A) が耳乃至鼻という感官によって生ずることを述べていることになる。ここでも覚への言及は見られず、ただ感官に言及するにすぎない。更に後者 (ad SK 23) は、明らかに覚としての「決智」、すなわち *adhyavasāya* (B) を説明するものである。従って、「金七」の *adhyavasāya* (A) と *adhyavasāya* (B) とは、その依存する器官に相違(それぞれ感官と覚)を有することになる⁽⁴⁾。また、「金七」の場合も、「二つの *adhyavasāya* の意味の解釈に相違があると考えられる。すなわち、*adhyavasāya* (A) の意味は、「唯解不能知」と規定されている。これは、「知」の原語が不明であるため、内容上の明確さを欠くが、ただ「解」と「知」が、一連の認識過程の中でそれぞれ段階的に位置づけられていることだけは明白である。つまり、ある対象を「解」する段階と「知」する段階とである。「金七」の *Saṃkhyā* 体系から考えて、対象認識に関わりうる器官は、覚、我慢、意、感官の四種のみである。「解」する段階は感官が担うのであるから、「知」する段階は、覚、我慢、意において担われることになる。また、認識構造上最終段階を担うのは覚である (SK 36, 37)。従って、「知」する段階は、少なくとも覚以前の段階であること、すなわち覚としての「決智」= *adhyavasāya* (A) 以前であることとなる。

『金七』の *adhyavasāya* (B) は、「是物名関」云々と定義されており、この点では V_2 と一致する。問題となるのは、「唯解不能知」と規定される *adhyavasāya* (A) の解釈であるが、この *adhyavasāya* (A) は、対象認識における一連の過程の中で、*adhyavasāya* (B) に先行する段階であるから、 V_2 と同様に、言語表現される以前の段階を示すものと理解するのが最も適切であると思われる⁽⁵⁾。従って、「唯解不能知」(『金七』) = 「これはこのようであって、それ

外ではない。」(V₂)「是物名関」(「金七」)Ⅱ「これは瓶である。」(V₂)というように、概念上一致すべきものと考えられる。

以上のような「金七」とV₂の知覚解釈に対しては、NBhの知覚論との意味上の一致を指摘することができる。NS I.i.4には、次のように知覚が定義される。

「感官と対象の接触によって生じた、言い表わされない、錯誤のない、決定を本質とする知が、知覚である。」⁽⁶⁾

この中で、「言い表わされない」という限定語と「決定を本質とする」という限定語が共存するということは、NBhの解釈を総合すると、言語表現される以前の決定性を持った知、すなわちその知に基づいて言語表現された場合に、決して疑惑(Samsaya)とならないような知が、知覚であるということになる。⁽⁷⁾これは、V₂の「これはこのようであつて、それ以外ではない。」という決定」なる adhyavasaya(定)解釈と、実質的には一致すると考えられる。その表現上の相違は、それが主體的に表現されたものであるか、客観的に表現されたものであるかによって異なるものである。つまり、V₂の場合、言語表現される以前のものを実例で主體的に示そうとしたために、「このようであつて、それ以外ではない」という抽象的な表現をとらざるをえなかったものであり、NBhの場合、それを客観的に外から眺めることを通して、二つの限定語を採用したと考えられるのである。また、「金七」のSK4の註釈には、従来指摘されているように、NS I.i.4とはほぼ同文の知覚の定義が存在する。⁽⁸⁾このことは、「金七」の知覚解釈がNyaya学派と親近であるという見解を支持するであらう。

NBhの知覚論とSamikhya派知覚論との親近性を示すものは、PSTに引用されるSamikhya説中⁽⁹⁾にも見られる。それは、Varsaganyaの知覚の定義に対するある解釈の中に引用される一文で、同様の文章は、後に、「感官

の作用」(indriyavriti)が知覚であるとする Varsaganya の見解を、仏教側から批判する際の議論の出発点となっている。⁽¹⁰⁾ 従ってこの引用文は、Samkhya 派にとって比較的確感ある論書からの引用であると考えられよう。⁽¹¹⁾ 以下に、その PST 中の Samkhya 説は、それとはほぼ一致する NBh の叙述とを並置しておく。

「諸々の外的対象物に対して感官が決定すると、意は、その感官決定に対して追決定する。」⁽¹²⁾ (PST)。

「いかなる場合でも、知覚の対象に対しては、〔最初に〕知識主体の感官による決定があり、後に意による追決定がある。」⁽¹³⁾ (NBh ad NS I.i.4)

この PST 中の Samkhya 説は、「感官が決定する」という表現を用いている。その場合に問題となるのは、「決定」(shen pa) の原語と、その意味である。まず、shen pa の原語であるが、これは次のように想定しようと思われ、すなわち *Pratīyāsamuccayavriti* は、Nyāya 学派の知覚論を扱う際に NS I.i.4 を引用しているのであるが、それに対する PST の註釈は、*vyavasāya* は shen pa と訳されている。⁽¹⁴⁾ また、PST と同じチベット訳者(blo gros brtan pa) は、*Mokṣākaragupta* の *Tarhābhūṣa* を訳しているが、そこでは、*adhyavaseya* が shen par bya ba と訳されている。⁽¹⁵⁾ 従って、この場合の Samkhya 説中の shen pa の原語を、*vyavasāya*、若しくは、*adhyavasāya* と考えるのは妥当であろう。このことば、上記の二文 (PST, NBh) が、表現上、ほぼ完全に一致する「ことを意味する」。

またその意味であるが、この一文を引用する「他の者たち」⁽¹⁶⁾ (gshan rnam) の解釈によれば、「感官が決定する」は、「外的対象の形象を有する感官の作用」⁽¹⁸⁾ と言い換えられ、また「諸感官の作用は、個々の対象に近づいてから、それ(対象)の形象に転変することであると知られるべきである」⁽¹⁹⁾ とも述べられている。ここでは「感官の決定」

Ⅱ「感官の作用」Ⅱ「対象の形象に転変すること」という関係が成立していることになる。感官の作用が対象の形象に転変することであるという考え方は、感官の作用を対象の形相を持つこと⁽²⁰⁾の獲得 (cādrūpapatī) とする YD の見解と一致する⁽²¹⁾。また、NM, NVT, TRD 中の Sāṃkhya 説にも見られる考え方である。しかしながら、このような「感官の決定」Ⅱ「感官の作用」Ⅱ「対象の形象に転変すること」という解釈は、決定性を持ちつつ未だ言語表現されないという NBh の知覚解釈とは異なった観点に基づくものである。NBh の解釈は、疑惑の排除された明確な言語表現を導くための前段階を指示するものであるが、PST の「他の者たち」の解釈は、言語表現の前段階を意図して説かれたものではなく、知覚としての感官の作用そのものを直接に述べたものである。従って、この二つの解釈を単純に比較することはできない。ただ、「対象の形象に転変すること」が言語表現を含むとは考えられないし、決定という語が共通であるという点から見れば、PST の「他の者たち」の解釈は、決定性を持ちつつ言語表現されないものであるということになる。これによれば、PST の「他の者たち」の解釈は、NBh の解釈に包摂されるべきものとなる。

右の論述によって、先に引用した二文 (PST, NBh) は、意味解釈に多少の相違は存在するものの、表現上のはば完全な一致から言って、極めて近い関係にあると考えられよう。

ところで前に示したように、知覚を感官の作用とする Vātsākyā の見解に対する「他の者たち」の解釈には、「感官の決定」Ⅱ「感官の作用」という考え方が存在した。これによれば、知覚が「感官の決定」であることになる。またこのことは、PST に次のようにはっきりと述べられている。⁽²²⁾

「外的対象物に対して感官が決定するのが知覚の定義である。」

これは、知覚 (pratyakṣa, mīmāṃsā) の定義として、「感官が決定すること」に明確に言及しており、『金七』 V_2 の知覚解釈と、表現の上からは、ほぼ一致する。また前述したように、 V_2 の「感官が決定する」というのは、「これはこのようであって、それ以外ではない。」という決定⁽²³⁾なる実例で示され、PSTのそれは、「他の者たち」によって、「対象の形象に転変すること」と解釈される。両者は、前者が一つの判断の形を示し、また後者が転変という概念を含む点で相違するが、言語表現以前の段階を示す点で一致する。そしてその両者は、共に Saṃkhyasūtra 説であるから、ほぼ同一の流れに属する知覚論と見ることも可能である。

以上、SKの知覚の定義に対する『金七』 V_2 の解釈を、他派文献との比較を通して検討してみた。『金七』と V_2 の知覚解釈は、「知覚とは、それぞれの対象に対する決定である。」とSKの定義を読み、その「決定」(adhyavasāya (A)) を SK 23 の「決定」(adhyavasāya (B)) とは異なったものとする。すなわち、二つの adhyavasāya が、それぞれ感官及び覚に依存しており、その意味上の相違は、言語表現の有無に関わっていると理解できるのである。このような『金七』 V_2 の知覚解釈は、意味上 NBh の知覚解釈と一致し、また PST 中の Saṃkhyasūtra 説との類似性も持つものである。更にまた、PST 中の Saṃkhyasūtra 説と NBh の知覚論との間にも親近性が認められることから、『金七』と V_2 の知覚解釈は、NBh の知覚論と親近な立場にあると思われる PST 中の Saṃkhyasūtra 説と同一の流れに属するものであるという理解が可能であろう。

ところで、SK に対する他の七種の註釈書⁽²⁴⁾の、Gauḍapādabhāṣya, Saṃkhyasādhārṇava, Māhārāṣṭra 等は、明確ではあるが、 V_2 と類似するものである。⁽²⁵⁾ J は、SK の知覚の定義を V_2 等と同様に読むが、その解釈では、覚において知覚を認めている。感官は門 (dvāra) にすぎないのである。また、そこには YBh の知覚解釈と共通

する表現が見られる。⁽²⁴⁾ YD と TK は ⁽²⁵⁾ SK の知覚の定義を「知覚とは、それぞれの対象に対して作用するところの感官に対する決定である。」⁽²⁶⁾と読み、覚において知覚を認めている。この解釈は、知覚の直接の対象が感官であることを示しており、その点で、感官を門とみる」と相違する。C の知覚解釈は、二つ存在する。一つは、SK の知覚の定義を「知覚とは、およそそれによってそれぞれの対象が決定されるところの感官である。」⁽²⁷⁾と読む。知覚を感官そのものとする解釈である。⁽²⁸⁾ C の第二の解釈は、SK の定義に対する直接の解釈ではない。それは YBh の知覚の定義と類似するものである。⁽²⁹⁾

以上、『金七』と V_2 以外の註釈書の知覚解釈を概観してみた。それによって明らかのように、『金七』と V_2 の知覚解釈は、NBh の知覚論と類似する点で、独自の立場を示している。また、『金七』や V_2 と類似する PST 中の Samkhya 説や Varsaganya の知覚論の解釈の中に存在することを考慮すれば、『金七』と V_2 の知覚解釈の源泉を、他の註釈書よりも、より古くまで遡ることも可能であろう。

略号表

【金七】=『金七十論』（大正藏五四卷）

C= *Śāṅkhyacandrikā* (Haridāsa Saṃskṛta Granthamālā 132, 1953)

J= *Jyotirmāṅgalā* (Chowkhamba Skt. S. No. 296)

NBh= *Nyāyabhāṣya* (*Nyāyadarśana of Gaṇṇatma*, Vol. 1, Ch. 1, ed. by A. Thakur, Mithila Institute Series, Ancient Text No. 20, Darbhanga, 1967)

NM= *Nyāyamanjari* (Kashi Skt. S. No. 106)

NS= *Nyāyasūtra*

NVT= *Nyāyavārtikāṭīkā* (ed. together with NBh)

PST= *Pramāṇasamuccayaṭīkā* (Tohoku No. 4268, Otani No. 5766)

「対象の形象に転換した感官」が知覚であるところから、それによって彼ら (Sāṃkhya 派) の定説である「*indriyāṇyeva viśayākāraparipatātāni pratyakṣam ity hi teṣāṃ siddhantah*」(TRD. p. 153-4) TRD は「対象の形象に転換するの」が感官の作用ではなく感官そのものである。

(22) *phyi rol gyi don rnam la dban po shen par byed pa mñon sum gyi mshan nid do* (D fol. 70a³, P fol. 79a¹).

(23) 註 (4) 参照。

(24) 「特殊の限定を主とする……」*viśeṣāvdhārāṇapradhānā*…… (J. p. 70¹⁵) の表現は YBh. ad *Yogasūtra* I. 7 の知覚の定義の中に見られる。

「感官という通路を通して心が外的事物に染着される」に基いて、それ(外的事物)を対象とする「作用」すなわち「一般と特殊を本質とする対象の中の特殊の限定を主とする」[心]作用が「あり、それが」知覚という認識根拠である。」*indriyapranalīkayā cittasya bāhyavastūparāgāt tadviśayā sāmānyaviśeṣātmano 'rthasya viśeṣāvdhārāṇapradhānā vṛttiḥ pratyakṣam pramāṇam* (YBh. pp. 274-281).

(25) 両者は極めて類似した解釈を示す。拙稿「Sāṃkhya 派とその *pramāṇa* 論」印仏研二二八一、昭和五十五年参照。

(26) 「感官に対する決定」は *tasmin* (= *indriya*) *adhyavasāyaḥ* (YD. p. 35, TK. s. 80²²⁻²³) の語である。Chakravarti 等は YD. Ⅵ TK. 6 の知覚解釈を「感官に対する決定」と読む(P. Chakravarti, *Origin and Development of the Sāṃkhya System of Thought*, Calcutta, 1951, p. 172; それで知覚の定義が「YD. Ⅵ TK. Ⅵ 基礎づけられ、その説明である。The entire definition comes thus: the senses come in contact with their objects, the *buddhi* or intellect then operates in it。」) ところが読みかたは、覚が直接は声等を対象とするものでなり「*antaḥkāraṇa*」は「それによって定められたもの (= *prativāsa* = 声等) を対象としたもの」(*anīyataviśayatva*) である YD. Ⅵ TK. Ⅵ 主眼 (p. 102²³) を説明し、*prativāsa* *niyataviśayo 'dhyavasāyate niśīṭyate 'neneti prativāsyādhyavasāyam* * *indriyam* (C. p. 6-7) の「*文*」を *prativāsyādhyavasāya* が *Bahuvrīhi*-compound であることの説明は、Text の *ya* を *yam* と誤った。(28) 知覚を感官そのものとする見解は極めて珍しいものである。ところが「*は*」感官の作用として「*感覚* (= 感官の作用) とは、無分別なるものであり、作用であり、果びである」*ālocanam* = *nirvikalpakam vṛttiḥ phalam* (C. ad SK 28. p. 25¹³) と述べている。この両者を考えあわせれば「*は*」手段としての知覚を感官とし、その感官によって生ずる果を感官の作用としたと考えることが可能であろう。

(29) 「その中で、感官という通り道を通して心が外的事物と結合することに基づいて、感官と接触した対象の特殊の限定を主と

する〔心〕作用が〔あり、それが〕知識である。』tatendriyasañcāramārgena bāhyavasūsambandhāccittasyendri-
 yasanikṣīṣārtthaviśeṣādvadhāraṇapradhānā vittiṃ pratyakṣam (C. p. 7³⁻⁴) 註(2) に引用した YB_h の原文を正確に
 すれば、その類似性は明らかである。